

健康文化

年寄りの冷水

高田 健三

昨年の暮れは寒さが厳しく、名古屋にしては珍しい大雪になった。積雪は20センチを超えるほどにもなったろうか。久しぶりの白一色を背景にして、寒々と佇む冬枯れの庭の木立を眺めていると、誰だったかの版画の冬景色を思い出した。寒風に耐えて来た立木の小枝や幹の表面に、こびり付いた雪が、木立の存在感を一層引き立てて見せる。たまに眺める冬景色は、都会の人間の心を和ませてくれるものがある。

とは言へ、それは恵まれた風土に暮らす人達が味わえる情緒の世界であって、新潟など豪雪地方の人達にとって、雪ともなると、時にはそれが荒れ狂う“白い恐怖”ともなるのである。嘗て金沢大学医学部の知人が、冬は雪見酒を呑んで過ごすしか無いんですよと、自嘲気味に言うのを聴いて、長い冬を肩をすぼめて凌いでいる人達のやるせなさが伝わってきた。私など炬燵に暖まりながら、雪見障子のガラス越しに、しっとりと雪見酒の情緒を楽しめたら最高なのだがと、慰めるつもりがつい不埒なことを言ってしまうと、後の言葉に詰った。

自然現象を敵に回すか仲間と考えるかで、ものの見方は大きく違ってくる。西欧では常に対立するものとして捉えてきた歴史がある一方、我が国の文明は自然との共生から培われて来たという違いがある。日本人ほど情緒豊かに自然と向き合える国民は無いと言われる所以である(本誌、10号)。古来、日本人は四季折々の自然の移ろいに無常を感じ、自己の行動を律してきた。冬になると、何時も冬景色を観に、旅行に出かける知り合いがいる。野山の雪景色に心惹かれるものがあるというのも、自然を忘れかけた都会人の心のどこかに、先人達が見てきたであろう静謐(せいひつ)な原風景に対する憧憬が残っているからであろう。冬になると、若者達は新雪の銀嶺に心躍らせ、又、人生の喜怒哀楽を経てきた中高年は、雪に囲まれた山里の温泉宿に安らぎを求め、旅情を掻き立てられるのも自然の成り行きなのである。

人間ばかりではなく、動物たちの中にも、冬の温泉を楽しんでいるものもいる。信州上林温泉から奥へ一時間ほど杣(そま)道を登ると、地獄谷温泉という山家の一軒宿がある。その付近に生息する野猿は、その野天風呂に入ること

で有名である。深い雪に包まれる冬、如何にも“いい湯だな”といった表情で、湯煙に包まれながら湯に浸かっている写真は、カレンダーにもなったほどである。

私と家内がそこを訪ねたのは秋口であったが、結構の数が居たのには驚いた。辺りの谷を見渡すと、野天風呂に浸かったり道沿いに座ったりして、のんびりした雰囲気は漂っていた。そこで一つ気がついたことは、他の観光地などにいる猿に比べて、人の持ち物などをひったくったりするような攻撃的な気配がないのである。辺りには人と猿との平和な時間が流れているのである。温泉に浸かることで、人と共有する世界が広がったためであろうか。普通、冬は野猿にとって生きていくのに厳しい季節であるが、ここでは温泉で体を温めることで“心身”共にストレスがとれて、闘争心が和らげられるのだろうか。もしかするとこの谷は、野猿にとって桃源郷なのかもしれない。

庭の雪景色を眺めながらあれこれ思いを巡らせていると、突然、五歳になる孫娘が現れた。彼女は初めての大雪に大喜びで、絵本で見たような大きな雪だるまを造りたいと言う。これまで何度か降った雪は、量が少なく、精々盆の上に載せる程度の雪ウサギしか作れなかった。それでも、庭の藪柑子の赤い実で目を入れ、南天の葉を差して耳にすると、小さくても可愛らしい白ウサギになった。その時はそれなりに喜んでくれていたが、やはり大きな雪だるまのイメージは彼女の心から消えてはいなかった。

冬の季節、雪だるまやサンタクロースは、子供心をメルヘンの世界へ誘う役どころである。雪の少ない福岡市に生まれ、子供の頃を過ごした私自身、一度でよいから、等身大の雪だるまを造りたいという願望があった。そこに待望の大雪である。そのせいか、何となく、そそられるものがあった。

あれこれしているうち、日も大分傾いて、気温も下がり始めてきた。家の者はもう遅いから明日にしようなどと言って動こうとしない。以前、彼女には翌日にしたことで、雪が融けてしまったという苦い経験があるので、今回は引き下がる気配がない。そうなるに我が家で一番孫に甘いと、自他共に認め合っている私の出番とならざるを得ないと言いながらも、子供の頃の願望を思い出していた。大急ぎでシャベルやスコップ、砂遊び用の赤いバケツなどをかき集めて作業に取り掛かった。雪だるまを据える所は、お客様へのご挨拶も兼ねて、玄関脇にすることになった。孫娘は目標が定まったこともあって、手当たり次第にその辺の雪をかき集め始めた。勢いに押され、私も縮み上がった指をだましまし我慢して、雪集めに参加した。初めは小さな雪玉も、雪の上を転がして居るうちに見る見る大きくなり、だるまの胴体ができあがった。後は夢

中で頭を完成させた。

昔と違って今は木炭の常備が家庭にはない。そこで、庭の枯れ枝などを集めて何とか目鼻の格好が付いたのは、辺りも薄暗くなり掛かって来た頃であった。最期にアクセントとして赤いバケツを帽子代わりに頭に被せて完成である。出来上がった雪だるまは、彼女と等身大とまでは行かないにしても、肩ぐらいの大きさはあったろうか。紛れもない大作である。それを見詰める彼女は、躰一杯に嬉しさを現していた。私はもう半凍えの状態であったが、何かやり残していたことに切りがついたというホッとした気持ちが湧いてきた。

作業も大詰めの頃であった。屈んで仕上げをしていた私は、立ち上がろうとした拍子にバランスを崩して後ろに転んだ。咄嗟に右手を後ろに着いて躰を庇ったが、その時、腰を捻挫したらしい。寒さの中で、足腰の筋肉が硬直していたせいでもあろう。翌日から段々痛みがひどくなり、年明け早々、やっとの思いで整形外科に診てもらいに行った。幸い“ぎっくり腰”ではなかったが、筋肉の捻挫だから、暫くは安静にして寝ていなさいと先生に言われた。自分自身でしたことだと家のものは冷たい。こんな惨めな正月は、長い人生の中で初めてであった。

十日ほどすると、腰の痛みは和らいできたが、今度は背中が痛くなってきた。エックス線検査の結果、腰椎の一つに軽い圧迫骨折が見つかった。腰痛が和らぐに従って、骨折に関連した痛みが顕在化したのであって、年末に転んだのが原因だと先生はいう。やはり、雪だるまのせいであった。鎮痛薬の他に、骨化促進剤の注射を当分の間、週二回続ける羽目になった。

孫娘の情操教育のためと思い、老骨に鞭打つての雪だるま造りは、延べ一ヶ月半の安静と、週二回の注射通いというハプニングを伴ったが、赤い帽子を被った雪だるまは、孫娘の成長を記すマイルストーンとして、私の記憶の一駒に加わることとなった。中に残り続けるであろう。しかし、これほど身に滲みだす“年寄の冷水”は初めてである。今でも気だけは若者に負けなつもりでいるが、肉体は齢相応であることを思い知らされた。

自由の利かない体でベッドに横たわっていて、改めて身体の不自由な同年輩の高齢者や、身体障害者の精神的苦痛は、さぞかしと思ったことであった。何も出来ずに、時間だけがどんどん過ぎて行くほど、苛々することはない。精々テレビを観るか、本や新聞を読むぐらいである。たまたま観ていたテレビニュースでテロップの誤字訂正が入った。ニュースや報道番組などに流される、テロップの誤字や間違いが何時も気になる。その都度、アナウンサーが訂正と紋切り型の謝罪ですませるが、番組自体の品位を損なうことにもなりかねない。

時には、人物写真の取り違いがある。間違えられた当人達はさぞかし嫌な思いをするに違いない。番組自体は勿論のこと、テレビ局の品格が疑われても仕方あるまい。

嘗て世界に誇った日本人の教養レベルが、最近おかしくなったと言われる。以前、本誌（33号）で取り上げたことがあるが、トップを争っていた数学のレベルが、近頃は元気がない。文部科学省が2,000人の十八才から六十九才の一般人に行った基礎科学知識調査は、先進国中十二位の結果であったという。国民が科学技術大国と思っていたのが、実は、裾野の貧弱な國なのであった。このままでは国際人として、日本人の知識レベルの更なる低下は免れ得ないであろう。そうかといって、今からその人達を再教育しても、間に合いそうにない。

少し前、インド屈指のIT産業トップのインタビューをテレビで観ていて、大いに考えさせられるものがあった。インドにおける今日のIT産業の隆盛、中でもソフト産業の世界トップクラスの強さの秘密を問われると、小、中学校で算数、数学を重点的に教えているからだ、と、即座に答えが返ってきた。そればかりでは無いにしても、経済新興国ブリックス（BRICs）の中でも、ゼロ（0）の発見など、数学や物理学の歴史に大きな足跡を残してきたインドの面目は今も生き生きしているのである。

最近話題になっている“国家の品格”（新潮新書）が届いた。数学者藤原教授はその中で、近年の日本の荒廃は、我が国に連綿と続く独特の“情緒と伝統の形”の衰退によると指摘する。今をときめく科学技術工業もそれを支える基礎力、つまり、数学や理論物理学のレベルが高くなければ、持続的発展は望み得ない。その基礎力を養うのが、我が国独特の美しい情緒であると言う。大胆な発想で展開する話は、43年生まれの人とは思えない内容である。団塊世代の人達がどのように読み解くか、大変興味をそそられるが、近頃、情緒の世界と縁の無さそうな人が増えているのは確かである

雪だるま騒動の結果、安静を強いられた間に、世の中の動きを、いつもと違った視点で見ることが出来て多々収穫があった。その一は、子供の教育が危ないということ。幸いに、新しい教育基本法が国会で議論され始めた。児童、学童の教育改革は喫緊の問題である。我が国百年の計を誤らないこと願うのみである。（2006.6）

（名古屋大学名誉教授）